

キュックリヒ先生の著作2点（追加2）

フレーベル館が刊行していた『フレーベルの窓』 1967年8月号の表紙裏面(2頁)に「フレーベル精神について」を執筆していました。「ゲルトルド・エ・キュックリヒ（埼玉県・愛の泉理事長）」とあり、その下に、ピアノの前で子どもたちとともに座るキュックリヒ先生の写真があります。子どもたちは愛泉幼稚園の園服を着ています。「保育者フレーベルがその時代の子どもたちの為に全く新しい世界を作ったように、私たちがまた今日の幼児たちの為に今日の子どもの世界を造らなければなりません」。キュックリヒ先生はそう勧めておられます。

この号の他の執筆者は作家の新田次郎、及川ふみ「幼児教育100年のあゆみ5 大正6年より15年まで」、小林純一「保育の中で生まれた童話とは」などでした。表紙絵は、黒田清輝の「湖畔」です。

『マイ・ニッポン 青い目のみた日本』（読売新聞社編）に「ツユ」を執筆していました（44～46頁）。もともと、読売新聞紙上に掲載された「マイ・ニッポン」というコラムの抜粋で、「G・E・キュックリヒさん（西ドイツ） 一九二一年、南ドイツ女史高等師範卒。翌年、米国福音教会より宣教師として来日、埼玉県加須市の社会福祉法人愛の泉理事長。七十二歳。同市在住」と紹介されています。「来日した年（大正十一年）のツユの印象は、サンザンなものでした。……でも、何年たつうちに、わたしにとってたまらない長雨も、コメをつくる農民には恵みの雨であることを知り、……そうしてみると、ツユも捨てたものではない」と書いています。（昭和46年12月25日刊行。読売新聞社、読売新書）

も日本の生活も四十七年。だから今ではドイツのことよりも日本の方がくわしいくらい。でも初めは、それこそ面くらいつばなし。その一つがツユでした。というのは母国では「来る日も来る日も雨」という、こんな奇妙な季節はなかったからです。

外国で生活するのに越えなければならぬ壁が三つある——
た度くつや本カパーが朝になるとカビだらけ。食べ物はすぐ腐

といわれている。言葉と気候、雨も、米を……農民は雨の雨であることを知り、自分だけの立場からばかり考えていたことがすかしくなりました。それからは苦手なツユとを「休憩」と決め、なるべしんびり生活するように心がけました。

そうしてみると、ツユも捨てたものではない。「雨」に青さを増す木々の美しさ。雨水をとめどもなく吸いつくす器のような草花。それに野先にボツンとぶら下げられたテルテル坊主は、ユーモアたっぷりな風物詩です。もっとも、このごろは見かけなくなりましたが……。

そして日本の文学や絵画にみられるモヤッとした憂愁は、このツユという特異な季節が多分に影響しているのではないかと考えるようになったことに、私は、私はすっかりこの国になじんでしまったようです。

といっても、今でも関節が痛くなったり、かぜをひいたり、肉体的には、やっぱりあまり愉快な季節ではありません。だから、いまはからだの管理を十分に、じっとツユ明けを告げるような雷鳴を待っています。

（一九二二年、南ドイツ女子高等師範卒。翌年、米国福音教会より宣教師として来日、埼玉県加須市の社会福祉法人愛の泉理事長。七十二歳。同市在住）

ツユ

G・E・キュックリヒさん
(西ドイツ)

農民には恵みの雨
と思えば……